

---

# 受け継がれる力

ベヘモス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

受け継がれる力

### 【Nコード】

N0985X

### 【作者名】

ベヘモス

### 【あらすじ】

毎夜見る迷路の夢。果てし無く続くと思っていたソレは、ある日突然終わりを迎えた。

迷路の果てに在ったのは不思議な空間。其処で俺は力を渡され、世界に蔓延る影と戦う事になる。

これは、ごく普通に生きて来た少年が謎の存在から力を渡され、世界を蝕む影と戦って行く物語……。

## 第一話 受け継ぐ者（前書き）

注意事項。

この作品は【魔法少女リリカルなのは】の世界観やキャラクター・設定等を使っていますが、原作ストーリーとは一切関係の無い物語です。

そう言うのが駄目な方は今すぐブラウザの戻るボタンを押して下さい。

もし、大丈夫だと言う方は【なのはキャラを使った別の小説】と考  
えてお読み下さい。

## 第一話 受け継ぐ者

俺は今夢を見ている。

夢の中の俺は、白い壁で出来た巨大な迷宮の中を彷徨っている。

ちゃんと出口に進めているのか、それとも袋小路に向かっているのかも分からない。

なんでこんな夢を見ているのか分からないが、それでも俺はただ前に向かって歩き続けた。

「お……、た……る……」  
「ん……」

今まで眠っていた俺は、誰かに起こされ徐々に目を覚まし始めた。  
夢の大迷宮はクリアする事は出来なかったが、今夜も眠れば起こされた地点から続きが始まる。

もう何年も同じ事を繰り返している所為で、すっかりこの夢にも慣れてしまった。

「おきて、たけるくん」  
「……おきるからゆらすな」

頭は未だに寝惚けているが、起こされていると言つ事はコレ以上寝ていると遅刻すると言つ事だ。

俺は眠い目を擦りつつ、今日も起こしに来た幼馴染の顔を見た。

「お早う、武君。今日もいい天気だよ」

「……おはよう、なのは。お前は今日も元気だな」

「私が今日も元気なのは、きつと武君のお陰なの」

「……意味が分からないって」

俺の名前は【宗谷 武】。海鳴小学校に通うごく普通の小学3年生だ。

趣味は身体を動かす事で、特技は……目が良い事か？ いや、これは特技なのか？

……まあ、それは兎も角として、さっき俺を起こしに来たのは【高町 なのは】。

ウチのお向いに住んでいる俺の幼馴染だ。

なのはとは生まれた日と病院が一緒に、俺の祖父ちゃんとなのはの父ちゃんが知り合いだ。

祖父ちゃんの繋がりが良く分からないけど、そう言った事からなのはとは昔から一緒に暮らしてる。……ホント、一緒過ぎるくらい一緒に暮らしてる。

「はい、武君」

「ん」

今俺達是一緒のテーブルを囲んで朝食を食べている。

なのはが手渡して来たのは、炊きたての白米が盛られたご飯茶碗だ。

……そう。なのはは、何時の頃からか俺ん家で食事を取るようになったんだ。

まあ、ご飯と一緒に食べるくらいなら別に問題はない。

ただ、何時の間にかなのはの私物が少しずつ増えていて、気が付いたら俺ん家になのはの自室が出来ていた。……アレを見た時は本気で驚いたよ。部屋に無いのが勉強机くらいだったからな。

ウチの両親はなにも言ってこないが、なのはの母ちゃんは泣いてるんじゃないのか？

最近はウチに入り浸りだから、自分ん家にも帰ってない気がするし。

「それじゃ、いつてきまゝす」

「いつてきます」

「いつてらっしゃい。…なのはちゃん。ウチの馬鹿息子の事を宜しくね」

「はい！」

「……馬鹿息子ってなんだよ、馬鹿息子って」

朝食を食べ終わった俺達は、何時もの様に一緒に登校する。

俺達を通う学校は、此处からだと少し遠いから7：30には家を出ている。

本音を言うと自転車通学したいんだけど、それには距離が足りないから毎日徒歩で通っている。

「あゝあ。私立に通ってる奴等は良いよな。毎日バスで通えるんだから」

「そうかな？ 私は歩きの方が好きだよ」

「どこら辺が？」

「毎日、武君と手を繋いで通える所」

「……なのはって本当に変わってるよな」

「別に変わってても良いもん」

もう当たり前の事だから気にしなくなったけど、なのはの奴登下校の時は必ず手を繋いでくる。

その何が嬉しいのか知らないけど、手を繋ぐと機嫌良く鼻歌を歌い始めたりする。

……そのお陰で、俺はクラスの男子からからかわれたてるんだけどな。

まあ、その程度で理由でコイツの手を離したりはしないけど、今日もからかわれるんだろっな。

「……やれやれ」

「ん？ 如何したの武君？」

「いや、学校行きたくねえな〜って」

「登校拒否は良くないと思うの」

「分かってるって」

何時もと変わらないやり取りをし、俺達は手を繋いだまま学校へ向かった。

学校も何時ものとは変わらず、クラスの男子にからかわれて、何時もと同じ授業を受けて、登校時と同じ様になのはと手を繋いで帰った。何もかもが何時もと同じだけど、こう言う毎日が嫌だとは思わない。確かに刺激的な事が起これば良いな〜って思うけど、劇的な変化は望まない。

ただ、こうしてなのはと笑って暮らせればそれで良い……って、小学生在願う事じゃないな。

学校から帰って来てから時間が経って、今は夕食時。

なのはの奴は、何時もの様に俺ん家で夕食を食べている。

昨日もウチで食べてたけど、なのはの母ちゃんは何も言ってこない

のかな？ 物凄く今更な気もするけどな。

「そう言えばなのはちゃん。今日はお家に帰るの？」

「うん。今日は泊まっていきます」

「……？今日は？じゃなくて？今日も？だろ」

「どっちにしろ同じだから良いの」

「そうそう。男の子が細かい事気にしないの」

「……細かいのか？」

ウチの母ちゃんは豪快と言うか、大雑把と言うか…… 兎に角、そんな感じの人だ。

父ちゃんはごく普通の人なだけだな。如何してこうなったのやら。

なのはが今日も泊まるって知ったら、なのはの母ちゃん泣き出すんじゃないだろうな？

高町家の家族間は大丈夫なのか、本気で心配になって来た。

「……………」

「あ、小母さん。お母さんに「暫くコッチに泊まる」って伝えて下さい」

「はいはい」

……俺が心配する以前に、もはや手遅れなんじゃないのか？

こんな状況に為っているのに、何も言ってこない高町家って一体……。

夕食を食べ終わった後、学校から出た宿題を片付け、居間でテレビ番組を見て、何時もの時間に就寝した。

布団に入ると眠気は直ぐにやってきて、気が付くと何時もの迷路の中にいた。



この迷路に挑戦するのは一体何度目か忘れたが、何年も続けているともはや日課みたいなものだ。  
夢の中で迷路に挑戦するのが日課って……我ながら意味が分からん。そう思っているんだけど、道の真ん中でジッとしていても暇なだけだし、今回も頑張るとしますか。

ゴールを目指して迷路を歩き続ける事、既に二時間以上が経っている。

実際には時計が無いから、感覚的にそれくらい経った様な気がするだけだ。

相変わらずゴールらしき物は見えず、何処まで行っても白い壁。もう見慣れた光景とは言え、もう少し変化が欲しいよな。

これでゴールに着いて何も無かったら、今までの頑張りはなんだったのか丸一日を掛けて考えたい。

「ゴールはまだかあ……」

黙ったまま歩き続けるのも気が滅入るし、時折何か独り言を言ってみるけど……特に変化無し。

それどころか、段々と空しく為って来るから辛い。

いい加減ゴールに辿り着いて欲しい……って、なんだありや？

ただ歩き続けていると、突如目の前に大きな扉が出現した。

さっきまで何も無かったのに、イベントも無しに行き成り現われたな。

まあ、他の道も無くなってるし、此処がゴールって事だよな。

…… なんだか報われた気もするけど、どうやって入るんだ？

「引き戸でも無ければ、押す訳でも無さそうだな」

目の前にある扉を観察してみるけど、取っ手も無ければ開け方も分からない。

ただ何も言わずに目の前に聳え立つだけの扉。

開け方が分からない以上、此处で立ち往生するしかない。

「…… ヤバイな。本気で何の為に頑張ってきたのか分からなくなってきた」

今までは、ゴールに在る物が知りたくて頑張ってきたけど…… 俺の努力は一体なんだったんだ？ 俺は決してただの壁を見る為に歩き続けた訳じゃないぞ。

…… でも、実際にあるのは開かない扉だけだし…… 夢の中とは言え、何をやってるんだ俺？

「あれ、武君？」

「…… ん？」

扉の前で立ち往生していると、後ろからなのはに声を掛けられた。今まで誰かと出会うなんて事は無かったから、今回なのはが出て来るなんて思ってもみなかった。

しかし、自分の夢にまでアイツが出て来るなんて…… 俺のプライベートルトは何処に？

「やっぱり武君なの。こんな夢で会えるなんて思ってたから、凄く嬉しいの！」

「自分の夢って…… 何を言ってるんだ、コレは俺の夢だろ？」

「えっ？ コレは私の夢なんじゃ……」  
「……如何言う事だ？」

この迷路は俺の夢の筈なのに、目の前に居るなのはも同じ様に自分の夢だと言う。

夢に付いて詳しく知っている訳じゃないけど、こんな事って普通あり得るのか？

俺達は良く分からない状況に頭を悩ませていると、今まで開かなかった扉が大きな音を立てて突如開いた。

状況は益々訳の分からない事に為ってるけど、とりあえずあの扉を潜れって事かな。

「……………」

「武君。如何するの？」

「行くしかないだろ。此処に居ても何も分からないんだしな」

「……そうだね」

「安心しろ。何が遭ってもお前だけは守るから」

「あ、うん！」

俺はなのはの手を確りと握って扉を潜った。

扉を抜けると周りの景色が一変し、何処か別の場所に飛ばされた。

俺達の後ろには扉はなく、周りは草が生い茂り、所々に木が生えている。

そして中心には台座が置いてあり、蒼い長剣と白い本が空中に浮んでいた。

「なんだ此処は？」

「あの剣と本、どうやって浮んでるんだろ？」

「……疑問に思うところは其処なのか？」

「だって、不思議なんだもん」

……確かになのは言う通り、剣と本が浮かんでいるなんて不思議ではある。

だけど、この場所に飛ばされっつてもかなり不思議だと思うぞ。……やっぱり俺って細かいのかな？

「でも、この状況は気に為るだろ」

《そんな細かい事気にしてたら大きく為れねえぞ》

「ぬあッ?!」

突然俺に話し掛けてきたのは、白のインナーに青いズボンを穿き、蒼いコートを羽織り、動きの邪魔にならないように腰の辺りベルトをした白い髪の男性だった。

顔は如何言う訳か、目の辺りに影が出来ていてよく見えない。

それになんとか、存在が曖昧と言うか……幽霊の様に透き通っている様に見える。

……まさか本物の幽霊じゃないだろうな。

《しかし、こんなガキに継承させないといけないとは……運命つても残酷だな》

《そうは言いますが、私達の力を受け継げるのがこの子達だけなのですから、仕方が無いですよ》

「うにやッ?! もう一人増えたの!?!」

今度現われたのは、黒のインナーと白のスカートを穿き、白を基調にした半袖のコートを黒い長髪の着た女性だった。

この人も目の辺りに影が出来ていて顔は良く分からないし、男性と同じ様に透き通っていた。

何処から現われたのか分からないけど、不思議と恐いとは思わなかった。

《そうは言うがな？極光？。こんなガキ共に戦いを強いるのは流石に心苦しいぞ》

《それは私とて同じ気持ちです。……ですが、此処まで辿り着いてしまった以上、今更引き返す事は出来ません》

《……相変わらず融通の利かねえ奴だな》

《貴方も、口は悪いけど優しい所は変わりませんね？蒼刃？》

《口が悪いは余計だ》

……なんか、この二人って長年連れ添った夫婦みたい雰囲気だな。今みたいなやり取りを夫婦漫才って言うのか？

まあ、そんな事は兎も角。この二人は一体なにで、俺達は一体何に巻き込まれたんだ？

《……さて、あまり時間もないし。さっさと引継ぎを終わらせるか》  
《ええ》

「引継ぎ？ てか、アンタ等は一体なんだ?!」

《俺達は只の狩人だ。世界に溢れた影を狩るな》

「影って一体なんですか?!」

《虚無の彼方から来る魔物。世界を蝕む者達です》

「そんな訳の分からないものを狩ってたのか?!」

《お前の言いたい事は分かるが、選ばれた以上覆す事は出来ないんだ。……わりいな》

《本当なら私達も、貴方達のような子供にこんな事を背負わせたくない。……でも、影は待ってくれないの》

「ちょっと待って下さい！ 少しは私達に考える時間を……」

《……ごめんなさい》

《それじゃ始めるぞ!》

何がなんだか分からないまま、彼等が言う引継ぎが始まった。

一体何が起こるのかと身構えると、俺の足元からは蒼い光が、なのはの足元からは白い光が立ち上る。

光が立ち上った時の衝撃で、俺はなのはの手を離してしまうが……傍にアイツが居るのは感じる事が出来た。

この光の中、一体なにが始まるのかと思っていたら、

「……………えっ？」

台座の上に在った長剣が突如出現し……俺の胸を貫いた。

此処が夢の中だから分からないけど、不思議と貫かれた痛みはない。

ただ、痛みが無い代わりに異物が入って来る様な違和感がする。

俺は剣を抜く事も出来ず、ただこの違和感が消えてくれるのをジッと待つ事しか出来なかった。

## 第一話 受け継ぐ者（後書き）

初めましてベヘモスと言う者です。

本当は自分、此処で別の小説も書いているんですが、何故かなのはネタが思い付いてしまい、七割見切り発車で連載する事にしました。

どちらの小説を優先して書くかは決めてませんが、更新速度は極端に速かったり遅かったりすると思います。

この辺りの匙加減は、自分の気分次第なので何とも言えません。

今後の展開ですが、二人は力を渡され？影？と戦って行く事になりますが……原作キャラの出番は殆ど有りません。

ジュエルシードの事件もオリキャラが解決する事になりまし、原作の名場面にも触れないと思います。

引き返すなら今の内だと思えますが……それでも続きを読みたいと思った方は、作者が失踪しない事を祈って下さい。

失踪しない限りは、頑張って書いて行きたいと思ってますので。

それでは、次回の更新をお楽しみに。

……小説のネタ被ってないと良いな。





## キャラ紹介

### 【宗谷 武】

本作の主人公で、公立の海鳴小学校に通う三年生。

幼馴染のなのはと一緒に居る為、クラスからは良く？夫婦？と呼ばれている。

コレに関して本人は「まあ、言わせとけば良いんじゃないか？」と、適当に聞き流している。

何時の頃からか、白い迷宮を彷徨う夢を見ているが、只の夢である以上、話のネタにしか為らないと思っている為、この事は親には話していない。

身体を動かす事全般が好きで、体育の授業が一番の楽しみ。  
だが、他の教科は良くも悪くも平均的。

本人は多少目がいい程度にしか認識してないが、動体視力はかなり良く。

高速道路を猛スピードで走る車のナンバーが分かる程である。

だと言うのに本人は「団体競技の時に、全体の動きが把握出来るから便利」くらいしか思っていない。

容姿は黒髪で、少し黒味がかった青い瞳を持つ。

ファッション等には特に興味が無いが、あまり派手な格好は嫌っている。

### 【高町なのは】

本作のヒロインで、武と同じ海鳴小学校に通っている。

生まれた日が一緒に、家がお向かいと言う事もあって、両親が忙しい時は宗谷家に預けられていた。

その所为か、宗谷夫妻の事を実の両親以上に自分の親だと思っている節がある。

士郎が入院していた時も宗谷家に預けられていたので、特に寂しさは感じていなかった。

今は武と同じ学校に通っているが、本当なら私立の学校に通う予定だった。

だが、いざ入学となった時に武とは別の学校に通うことが分かり、なのはがその学校の前で大泣き。

その後、なのはに泣き付かれた宗谷夫妻が高町夫妻を説得し、武と同じ学校に編入したと言う経緯がある。

学校では、周りから？夫婦？と呼ばれるくらいに武と仲が良く、本人も昔交わした「大きくなったら結婚しよう」と言う約束を今も信じている。

その為、武が他の女子と仲良く話していると途端に機嫌が悪くなるが、手を繋いだり、頭を撫でてやると直ぐに機嫌が治る。

小さい頃から武と遊んでいた為、運動神経は平均的。

他の教科はどれも優秀で、特に算数が得意科目。

容姿に関しては原作と大差ないが、友人関係は大きく違う。

兄である恭也の恋人の忍の関係で、すずかとは顔見知りでありサとも面識があるが、二人の事は「兄の恋人の妹と、その友人」程度の認識しかない。



## キャラ紹介（後書き）

皆さんの感想と評価が作者のやる気の源。

## 第二話 蒼い刃

「う、うわあああ………つて、あれ？」

草原で蒼い剣に胸を貫かれる夢を見ていた俺は、その夢から追い出される様に飛び起きた。

頭ではアレは夢だと自覚してるけど、身体の中に異物が入ってくる感覚は今も残っている。

この妙な不快感がなんなのか分からないけど、俺の身体の中に何かがある……そんな気がして為らなかった。

「……そうだ、なのは！」

あの夢に俺だけではなく、なのはも一緒に居た事を思い出した。蒼い光に包まれた後、アイツが如何なったのか分からない。

俺はなのはの無事を確認する為、アイツの部屋へと向かった。

「おい、なのは！ 起きてるか！」

アイツの部屋に着いた俺は、ノックもせず行き成り中に入った。

部屋に居るなのはは一応起きてはいたが、何をする訳でもなく上半身を起こしてボーっとしていた。

入って来た俺に反応せず、布団の中で呆けているところを見ると、あの夢で何か遭ったんじゃないかと心配に為る。

……まあ、只単にまだ寝惚けているって可能性もあるけどな。

「……なのは？」

「…たけるくん？」

漸く俺の声に反応したなのは、布団から出て一目散に駆け寄って来た。

直ぐ傍にまで来たのかと思ったら、如何言つつもりか知らないが俺の身体をペタペタ触って来た。

何を考えているのか分からないけど、物凄く心配してるなのは顔を見ると、文句を言えそうに無かった。

「え〜っと…なのは？」

「…良かった。武君、ちゃんと生きてる」

「あ、朝っぱらから縁起もない事を言うな」

「だって、夢の中の武君は剣に胸を貫かれちゃってたんだもん。心配にもなるよ」

「…やっぱり、なのはもあの夢を見たのか」

「なのはもって…もしかして、武君も？」

「ああ」

如何やら俺となのはは、全く同じ夢を見たようだ。

なんで同じ夢を見たのか分からないけど、俺もなのはもアレが夢とは如何しても思えなかった。

…アレをただの夢とするには、この胸にある違和感が拭い切れな  
いからだ。

如何にもすつきりしないまま、学校に登校した俺となのは。

何時もの様に授業を受けているものの、やっぱりあの夢の事を考え

てしまう。

あの夢は一体なんだったのか？ 俺の胸に残っている違和感の正体は？ 夢の中の奴が言っていた？影？とはなんなんだ？

……気が付くと俺は、先生の話も聞かずにそんな事ばかりを考えてしまう。

頭を切り替えて、真面目に授業を受けようとするけど……如何してもこれ等の事が頭から離れてくれなかった。

「……はあ」

「如何したの武君。何か悩み事？」

「あの夢の事で悩んでんの。……お前は気に為らないのか？」

「そりゃ気には為るけど……幾ら考えても分からないから」

「まあ、そうなんだけどな」

なのはの言う通り、幾ら考えても分からんモノは分からん。

そう割り切って忘れるのが一番なんだけど、如何も頭から離れてくれないんだよ。

お陰で今日の授業の殆どをノートに取れてない。……後でなのはに見せて貰おう。

「おーおー。相変わらず、あの夫婦は仲がいいな」

「そんなの何時もの事じゃねえか。それよりも聞いたか？ 昨日の夜に動物病院付近で事件があつたって」

「アレは事件じゃなくて事故だって聞いたけど？」

「どっちでも同じだろ？」

「……絶対に違つて」

動物病院で事故ねえ……。

そう言う情報を何処で聞いてくるのか知らないけど、物騒な事には変わないか。

とりあえず、そう言う事故はウチの近所で起こらないで欲しいものだ。

あの家に住めなくなると、祖父ちゃんの家につ越す事になりそうで恐いんだよ。

結局、まともに授業を受けられず放課後になってしまった。

なのはの奴はちゃんとノートを取っているみたいだし、後で見せて貰えば問題はないだろう。

今はさっさと掃除を終わらせて早く帰りたいもんだ。

「貰った!」

「なんの!」

「左藤に鈴井! テメエ等、箒でチャンバラしないで真面目に掃除しろ!!」

「「ええ」」

「文句を言っな!!」

はあ。如何して俺の班の連中は掃除に不真面目な奴ばっかりなんだ。真面目に掃除してるのが俺と女子の伊藤さん位なもんだ。

もう一人の女子の……栢山さんは今何処に居るのか分らん。教室には居たから、掃除が終わった頃にひょっこり顔を出すに違いない。

……コイツ等、一遍泣かした方がが良いんじゃないだろうか?

「あ、あの宗谷君。私達二人だけでも頑張ろう?」

「伊藤さん。……そうだな。役立たずに構ってる時間も勿体無いし」



「誰が設立たずだ！」

「デメエ等の事だ！！」

「俺／僕をコイツと一緒にするな！！……ん？」

「……掃除しようよ」

馬鹿二人を放置して、俺と伊藤さんは掃除を再開する事にした。

途中であの二人が行方不明になったりもしたが、特に気にせず掃除に専念した。

寧ろ、居ない方が静かで掃除に専念出来た。

掃除も大体が終わり、後はゴミ捨てだけとなった。

俺達がゴミを捨てに行こうとした時、丁度栢山さんが戻って来た。今まで何処に居たのか気になるが、あの馬鹿二人も捜しに行かないといけなかったし、タイミングが良いと言えば良いのかもしれない。俺は半ば強引に栢山さんにゴミ箱を押し付け、あの二人を探しに行く事にした。

流石に放課後の校内には殆ど人が居らず、辺りは静まり返っていた。ウチの学校はそんなに大きくないし、割りとすぐに二人を見つけられるだろう。

そう考え、俺はあの二人が居そうな場所を風漬しに探し始めた。

一階では見付からず、二階も捜しに行ったがコッチも空振り。

残っているのは体育館かグラウンドだけだが……まさか、先に帰ったりしてないだろうな？

あの二人は、前々から掃除をサボっていたから、先に帰っても不思議

議じゃない。

……コレで体育館に居なかったら、素直に掃除をサボって逃走したって先生に報告しよう。

心の中でそう決意した俺は、まだ捜していない体育館に足を踏み入れた。

「おい、左藤に鈴井。居るなら返事……しろ……」

体育館に入った俺は、目の前の光景に目を疑った。

何処から侵入したんか分からないが、黒い影の様な大型犬が床を食べていた。

……いや、食べると言うよりも床を黒く塗りつぶしている感じが。あの犬に黒く塗りつぶされて箇所と、無事な箇所とで境界線の様なものが出来てる。

アレが何をしてるのか分からないけど、少なくとも俺の手に負える相手じゃない。

此処は一旦戻って、誰が先生を呼んできた方がいい。

そう判断した俺は、あの犬を刺激しない様にゆっくりと後退し始めた。

俺がゆっくりと後退し始めると、犬が急に顔を上げてコツチを見てきた。

特に物音は立ててないのになんで気が付かれたんだ？ ……いや、

今は犬を刺激しない方が大事か。

俺は犬を刺激しない様に立ち止まり、アレがこっちに興味をなくすのを待つ事にした。

「

ッ！！」

「ッ？！」

犬がコツチをジッと観察してるかと思ったら、突如大きな遠吠えを挙げた。

余りの声のデカさに驚き、耳を塞ぐと……犬が俺に向かって跳び掛かって来る。

咄嗟の判断で左側に避けれたけど、犬は体育館の出入り口と激突した。

それで気絶してくれれば良かったんだけど、あろう事か犬は扉を喰らい、黒く塗り潰してしまった。

「…マジかよ」

5、6 mの距離を跳んで来たのも驚きだけど、あの扉の前に張り付かれたのは痛いな。

この扉はこの体育館と校舎を結ぶ唯一の扉で、あそこ以外に校舎に戻る手段がない。

一応左右にも外に通じる扉はあるけど、普段は鍵が掛かっていて開かない。

壁に取り付けてある梯子を上れば窓があるけど、あんな高さから飛び降りたら無事じゃ済まない。

外から助けが来るとは思えないし、此处はなんとかあの犬を退かして外に出るしかないか。

「問題はアレが如何動くかな」

犬の動きは目で追えるけど、如何動くかまでは予測出来ないからなさっきのジャンプ力を考えると、10 m離れていても跳びかかって来そうだ。

助走無しに10 mって、なんにもんだよこの犬。

「

……」

「うっ。向こうはやる気みたいだ」

扉を粗方塗り潰した犬は、再び俺に狙いを付けて来た。

俺は何時でも動けるようにすると、犬は前脚を振り上げ爪で切り掛かってきた。

俺は脚を振り上げた時点で後ろに跳んで回避したが、床は爪が当たった部分が黒くなっていた。

どうやら、あの犬に触れた部分は問答無用で黒くなるみたいだ。

「本当になんなんだよ、この犬?!」

俺は犬の爪や突進をなんとか回避する。

一瞬でも動きが遅れれば終わりだが、今の所なんとか避けられている。犬が何度目かの突進を繰り返すと、丁度良く扉の前から移動してくれた。

それを見た俺は、犬に目もくれず扉に近付こうとしたが

、

「なッ?!」

どう言う訳か、俺は扉の隣りの無事な部分に激突した。

俺は確かに扉に向かった筈なんだけど、如何言う事だ?

腑に落ちない俺は、もう一度扉に触れようと試みた。

扉に触れようとした手が境界線に入ると、行き成り消えて隣りの無事な箇所に出現した。

空間を跳び越えた……って言えば良いのかな? 本当にそんな感じで手が跳び越えたんだ。

此処まで来ると夢か何かだと思いたいが、後ろに居る犬の唸り声が現実だと教えてくれる。

俺は直ぐに手を戻し、今度は全身が境界線を越える様にジャンプした。

俺が境界線を越えるのとほぼ同時に、犬がまた突進して襲いかかって来た。

なんとかギリギリの所で線を越えたから助かったけど、こんな事何時までも続けられないぞ。

逃げる手段もなく、ひたすら謎の犬と追いかっこなんて考えたくもない。

俺の体力も無限じゃないんだし、何時かは体力切れで犬に食われちゃう。

この状況をなんとか出来ればいいんだけど……それが出来ないから困ってるんだよな。

「

ッ！！！」

「また来た！？」

息つく暇も無く、犬は再び突進を繰り返してきた。

俺は直ぐに横に跳び、突進を回避しようとするが、周りは既に境界線だらけで逃げ場が無かった。

それでも逃げ場が無いか捜していると、犬は俺の直ぐ目の前にまで迫って来た。

この距離じゃどんなに頑張っても腕や足は持っていられる。

仮に避けれてとしても、コレ以上動き回れるスペースがない。……

此処までか。

《能力継承……完了。？蒼刃？起動》

「ぬわぁッ？！」

突然頭の中で声が聞こえたと思ったら、足元から蒼い光が立ち上っ

た。

直ぐ其処まで迫っていた犬は、立ち上った光にぶつかり壁際まで吹き飛ばされる。

蒼い光に包み込まれた俺の目の前には、夢で見たあの長剣と同じモノが浮んでいた。

なんでこの剣があるのか分からないけど、俺は自然とこの剣に手を伸ばした。

俺が剣を握ると、服装があ夢に出て来た男と同じになり、包み込んでいた光も消滅した。

「……………」

犬は突然の出来事に警戒しているのか、いきなり襲ってくる事は無かった。

俺としても訳が分からない事だらけだが、此処から出る為には、あの犬を倒さないといけない事だけは理解出来た。

俺は剣を握り締め、呼吸を整えてから……静かに剣を構えた。

この動作に反応したのか、犬は姿勢を低くして何時でも跳び掛かれる様な体勢になる。

俺と犬の距離は大体10m。アイツなら一気に詰められる距離か。

コツチから攻め様にも不安要素は幾つかあるな。……ならアイツに喰われる前に斬り捨てるだけだ。

「……………」

俺と犬はお互いにその場から動かず、タイミングを見計らっていた。少しの間、其処でジッとしていると、

「ッ！……………」

溜めていた力を爆発させた様に、一気に跳びかかって来た。  
今度の突進は今までの中で一番早く、俺との距離を一瞬にして縮めて来る。

それでも俺は慌てず、ただ剣を上には振り被り犬を見据え、

「ッ！！」

躊躇わずに一気に剣を振り下ろした。

剣を振り下ろした時に、何かを斬った様な感じはしなかったが……  
犬は確かに斬り裂いた。

斬り裂かれた犬は消滅して行き、黒く塗り潰されていた部分は元に戻った。

体育館が元に戻ったのは良いけど、色々と謎が増えた気がするな。  
やれやれ、俺の人生は如何なってしまうのやら……。

### 第三話 黒い猿

謎の犬の影を撃退した俺は、ヨロヨロに為りながら教室に戻った。  
あの剣は犬が消滅した後、唐突に消え去り、服装も元に戻っていた。  
本当にアレは一体なんなのか、謎ばかりが増えて行く気がするよ。

左藤と鈴井の二人は、結局先生が見つけてた。

あの二人、掃除をサボっている所を先生に見付かったらしく、姿が見えない間は説教を受けていたらしい。

まあ、アイツ等はサボリの常習犯だからな。コレに懲りて真面目に掃除して欲しいもんだ。

そんなこんなで、俺の班は他と比べて大分遅くなったが、漸く今日の掃除が終了した。

……今日は色々な事が遭ったから、さっさと帰って寝たい。

「あ、武君！」

「……よう」

荷物を纏めて玄関に行くと、何時もの様になのはが俺の事を待っていた。

なのはとは同じクラスだけど、ウチの班は何時も遅いから如何しても待たせちまう。

「待てないなら先に帰っても良いぞ」……とは言ってるけど、先に帰った試しがない。

あんまり待たせるのも心苦しいんだけどな……。

「何時も遅くなって悪いな」



「うん。私が好きで待つてるんだもん。気にしてないよ」

「…そっか。ありがとな」

「にやはは。別にお礼なんて良いよ」

「俺が言いたい気分だったんだよ」

コイツと話していると、さっきまで戦っていたのが嘘の様だな。寧ろ、アレが夢や幻の類だったらどれだけ良いか……。

現実逃避なのは分かってるけど、そう思えちまうんだよね……。

「はあ……」

「如何したの武君？ 疲れてるみたいだけど」

「色々と遭ってね。現実逃避をしたくなっただけだ」

「ほ、本当に何が遭ったの？」

「……なんて説明すれば良いか分からん」

影の様な犬に襲われて、夢に出て来た剣で撃退した……なんて言えないよな。

流石にこんな事はコレっきりにして欲しいけど、如何なる事やら。

……せめて、なのはを巻き込まない様にしたいもんだな。

あの犬に襲われてから、大体五日くらいが経った。

その間に再び襲われるといった事はなく、平穩無事な毎日を送れている。

今日は日曜で学校が休みだから、なのはを連れて散歩に出ている。

今日は雲一つ無い晴天で、時折吹く風が心地いい。

やっぱりこんな日は家に籠もってないで、外に出ないと勿体無いよ

な。

「いい天気だね、武君」

「そうだな。こんな日はノンビリ散歩するのが一番だな」

「……偶に思うんだけど、武君ってお年寄りみたいな楽しみ方するよね」

「俺の祖父ちゃんを見る限りだと、そんな事はないと思うが？」

「武君のお爺ちゃんを一般の人と比べちゃいけないと思うの」

「……さり気無く酷い事を言っな」

特に行く当ても無い俺達は、何処に行く訳でもなく、適当に海鳴市を散歩している。

とは言っても、市の中心部は人が多いし五月蠅いから、なるべく人の少ない場所を歩いてるけどな。

今も人通りの少ない土手を二人で歩いてるくらいだ。

別に人ごみが嫌いって訳じゃないけど、こう言う時くらいは静かなほうが良い。

「あ、見て武君。川岸の広場でサッカーの試合してるの」

「ん？ どれどれ……」

なのはが指差した方では、確かにサッカーの試合が行われていた。戦っているのは「丘山JFC」と……「翠屋JFC」？

「おい、なのは。あそこで戦ってるの、お前の父ちゃんのチームだぞ」

「へえ、そうなんだ」

「反応薄いな……」

「だって、如何でも良いし」

……土郎さん、貴方の娘はこんな風に育ってしまいました。

いや、幾らなんでも興味ないは酷いだろ。少しくらいは興味をもつてやれよ。

なんだ？ 今のなのは反抗期か何かなのか？

「ほら、武君。早く行こう」

「別に急ぐ目的がある訳でもないし、慌てる必要は無いだろ」

「……お父さんに会いたくないの」

「あゝ、最近家に帰って無いから顔を合わせ辛いと」  
「うん」

確かに、連絡を入れているとは言え、一週間も自宅に帰ってないんじゃないか。

お向かいなんだし、もうちょっとまめに帰っても良いと思うんだがな。

……まあ、それはそれとして。俺も土郎さんの説教は聞きたくないし、此処はさっさと退散するとしますか。

「それじゃ行くか」

「うん！」

俺はなのはの手を取って、早足でこの場を後にした。

その時、一匹のイタチ……らしき動物が俺達の事を見ているのが目に入った。

まあ、動物が人の事を観察するのは良くあるし、一々気にしても仕方無いけどな。

土手を離れた俺達は、町中を彼方此方歩き続け……気が付いたら、海鳴神社に辿り着いていた。

なんで神社に来たのかは分からないけど、特に宛も無く歩いていたからな。

多分、歩いている途中で変な道にでも入ったんだろう。

「武君、お参りでもするの？」

「それは別に良いだろ。……でも、歩き続けて疲れたから、ちょっと休ませて貰おう」

「本当に歩きっぱなしだったもんね」

俺となのはは、鳥居の下階段に邪魔に為らない様に座り込んだ。今日の神社は休日にも関わらず、人の姿はなく閑散としている。

まあ、休日と言っても今は四月。お参りする季節としては少々時期外れだな。

「……神社は静かだな」

「少し寂しい気もするけど、ノンビリするには丁度良いのかもな」

「やっぱり、お爺ちゃんみたいだよ武君」

「なら、俺に付き合うお前はお婆ちゃんだな」

「……武君と一緒になら、それでも良いかも」

「良いんかい」

特にする事も無く、なのはとこうしてノンビリする老後か。……うん、良いかもしれないな。

まあ、そんな先まで一緒に居られるのか分からないけど、そう言うのも悪くないな。

ただ贅沢を言うなら、その場面にお茶とお菓子が有れば完璧だったな。

……次になのはと散歩する時は持つて来るか。家で準備すれば良いだけ出し。

「……」

俺もなのはも特に喋る事無く、ただ此処から見える街並みを眺めている。

街が一望出来る訳じゃないけど、この場所から見える景色は嫌いじゃない。

本当にお菓子とか持つて来れば良かったな、って思っていると、風も吹いていないのに木々が突然ざわめき始めた。

俺は誰かが木を揺らしているのかと思い、後ろを振り返ると……神社の境内に黒い影が湧き出しているのが眼に入る。

「なにアレ……」

「さあな。ただ、あの夢で言っていた？影？ってアレの事らしいぞ」

なんでこんな時に出て来るのやら、少しは空気読めよな。

心の中では文句を言いつつも、なのはの手を引いて静かに傍にある森の中へ向かった。

本当なら階段を降りれば良かったんだけど、降りてる最中に襲われたら大変な事になる。

なら、障害物の多い森の中を通って言った方が多少は安全だろ。

「良いか、なのは。絶対に俺の手を離すなよ」

「う、うん」

あの影の正体が一体なんなのか気になるけど、今はなのはを守る事の方が大事だ。

境内で湧き出している影は、前みたいに犬の形にはなっていないけど、

何時襲い掛かってくるか分からない。

今は少しでも早く森の中に入って、あの影から遠ざからないと……。

俺達は物音を立てない様に森の中に入ろうとすると、湧き出している影が次第に姿を現し始めた。

このままだと何時襲われるか分からない。そう感じた俺は、なのはの手を引つ張り森の中に駆け込んだ。

森の中に駆け込むのとはほぼ同時に、何かの鳴き声が聞こえて来た……。

何かの悪寒を感じた俺は、なのはを押し倒すようその場に倒れ込む。すると、俺達の居た場所を黒い影が跳び込み、正面にあった木に張り付いた。

「……なんだありや？」

「黒い……お猿さん？」

一体何が木に張り付いたのかと思ったら、人間の大人くらいの大きさの影の様な猿だった。

前回は犬で、今回は猿。……影の姿形つてのは毎回違うのか？

まあ、その辺りは如何でも良いとして……よりによって猿の形をした影か。

今回も犬だと思って、障害物の多い森の中に入ったのに……これじや意味が無かったかもな。

猿は縦横無尽に駆け回るイメージがあるから、周りにある木々も大して役に立たないな。

「……なのは、走れるか？」

「う、うん。大丈夫」

「そっか。……なら、絶対に立ち止まるなよ！」

俺はなのはの手を取って、街とは反対側の方に走り出した。

猿は直ぐに木々を伝い、俺達を追いかけ始める。

相変わらず、なんで追い掛けて来るのか分からないけど、アイツに掴まったら碌な事に為らないのは分かる。

だから、絶対に逃げ切らないと行けないんだけど……問題は俺となのはの体力が持つかだな。

## 第四話 終わる日常

謎の猿から逃げるために森の中に入ったが、やっぱり失敗だったかもしれない。

周りに生えている木々は、俺達には邪魔だがアイツには格好の足場に為っている。

完全に出現する前に階段を降りれば良かったのかもしれないが、降りてる最中に後ろから襲われる方が危険だ。そう思ったからこそ森に入ったのに……。

「ハアハア……」

「大丈夫か、なのは」

「な、なんとか……」

追いかけて来る猿から逃げるために、俺達はずっと全速力で走り続けている。

俺はまだ大丈夫だが、なのははそろそろ辛いみたいだ。

あの猿は疲れを知らないのか、ずっと変わらない速度で追いかけて来る。

このままだと、追いつかれるのも時間の問題だな。

「

ッ！！！」

「ッ?! なのは、跳ぶぞ!!」

「え…… キヤアッ?!」

右の方から跳びかかって来た猿を、前に転がるようにしてなんとか避ける。

今のはなんとかだったが、こんな無茶な避け方何時までも続けられ



るわけが無い。

早くこの猿から逃げ切りたいけど、疲れ知らずのコイツから逃げれる気がしないな……。

立ち向かおうにも、素手でこんな得体の知れないのと戦いたくないし。

……せめてあの時の剣があれば、なのは一人を逃がす事が出来たかも知れないのに。いや、今は泣き言を言ってる場合じゃないか。

「なのは、走れるか？」

「ご、ゴメン。ちよつと足が……」

そう言っとなのはは、足首の辺りを手で押さえる。

さっきの無理なジャンプで足を捻ったのか。時間も無かったとは言え、もう少し考えれば良かった。

俺はなのはを背負って行こうと考えたが、再び猿が襲いかかって来た。

咄嗟に俺はなのはを突き飛ばして猿を避けた。

猿が通り過ぎた場所は、問答無用で黒く塗り潰されている。

犬でも同じ様なことがあったが、本当にコイツ等はなんなんだ？

「

……」

「い、いや……」

「なのは！？」

黒い猿は、足を挫いて動けないでいるなのはに狙いを付けた。

避ける為とは言え、なのはの手を離しちまったのは不味かったか……。

俺は近くに落ちている物を手当たり次第に投げるが、境界の所為で猿に当たらずに空間を越えてしまう。

どれだけ投げてても、空間を越える所為で猿に掠りもしない。

理屈は分からないけど、あの剣じゃないとコイツ等には攻撃を当てられない様だ。

このままじゃ、目の前でなのはがアイツに喰われちまう。……そんなの絶対に嫌だ！！

「……狩人だか何か知らないが受け継いでやる。だから、俺に力を貸してくれ？ 蒼刃？ ！！」

俺がそう叫ぶと、足元から蒼い光が立ち上り蒼い長剣が出現した。ただ、剣の形状が日本刀の様な反りが入った片刃の長剣に変わっていた。

なんで形が変わっているのか氣に為ったが、今はそんな事を氣にしている場合じゃない。

俺は迷わず剣の柄を握り、黒い猿に斬り掛かる。

真っ直ぐ振り下ろした剣は、あと少しと言った所で避けられてしまったが、ちゃんとあの猿に届いた。

……剣が届く事さえ分かれば十分だ。コレ以上なにかされる前に斬り捨てる！

「た、武君……」

「其処でジツとしているのは。直ぐに片を付ける」

俺は剣を肩で担ぐように持ち、猿との間合いを詰め……一気に剣を振り下ろした。

振り下ろした剣は、空間を飛び越える事無く振り下ろされるが、アイツは近場の木に登って剣を避けやがった。

アイツが登った木を切り倒せば良いんだけど、そんな事をしたら倒れた木に押し潰されかねない。

それに、木を一本切ったところであの猿が降りて来るとは限らない。此処はアイツが降りてくるのを待つしかないな。

「……………」

俺は剣を寝かせ顔の右側に寄せ、左足を前に出して構える。

この構えのままその場から動かず、ジツと相手の出方を見る。

姿こそ見えないけど、木々が不自然に揺れている所からこの近くに居る事は分かっている。

問題なのは、何時どのタイミングで攻撃してくるのかと言う事だ。

その場でジツとしていると、後ろから何かが飛んでくるのが分かった。

俺は直ぐに振り返り、飛んで来たものを斬り落とした。

今斬ったのは黒く塗り潰された木の枝だったが、それを立て続けに投げられる。

飛んでくる速度は大した事無いが、投げられる数が多い。

一度に何個も飛んで来ないが、休む間もなく飛んで来るのは少し辛い。

この眼のお陰で飛んでくるコースは読めるけど、集中力を切らせたらず不味いな。

そんな事を考えながら木の枝を斬っていると、突然アイツの攻撃が止んだ。

次は何を投げて来るのか警戒していると、猿は黒い棒を持って俺の目の前に現われた。

「…………観念して俺に斬られる気になったのか？」

「……ッ！！！」

「何言ってるのか分からねえよ」

俺が軽口を叩くと、猿は黒い棒を振り被って襲いかかって来た。

剣術の真似事でもしてるのか、その黒い棒を真っ直ぐ俺に振り下ろ

して来る。

俺はその棒を斬り捨て、刃を反し猿に斬り掛かる。斬り掛かりはしたが、持ち前の瞬発力で肩を掠める程度にしか斬れなかった。

俺は間合いを離される前に踏み込み、胴から薙ぎ払おうとする。

だが、それも間に合わず、刃先でなぞる程度しか斬り込めなかった。

子供の身体だから仕方が無いのかも知れないけど、やっぱりリーチが足りないか。

多分、祖父ちゃんなら最初の一太刀でコイツを斬り捨ててる。

遊びに行く度に無理矢理に剣術を教えてくるけど、今度は真面目に受けてみようかな。

「ま、それもこの場を生き残れたらの話か」

俺はさっきと同じ構えを取って、猿との間合いを計る。

アイツを斬り捨てるには、後二・三步は踏み込まないといけないけど……させてくれる訳ないか。

それどころか、さっきのを警戒してまた物を投げて来るかもしれない。

投げて来るだけだと、また倒し辛くなるから厄介だな……。

そんな風に考えていると、猿は意外にも俺に跳びかかって来た。

てつきり俺は、離れた所からチマチマと投げて来るだけだと思っていたから、これには少し驚いた。

でも、自分から向かって来てくれるなら、正面から迎え撃てば良いだけだ。

俺は直ぐに剣を振り下ろすが、猿は刃先数cm手前で急停止した。急停止した猿はまた直ぐに動き出し、俺の顔目掛けて飛びかかって

くる。

俺は咄嗟に剣から左手を離し身体を逸らす事で避けた。そして右手に持った剣を思いっきり振り上げ、背中から猿に斬り掛かる。

だけど、この一撃も上手くかわされてしまった。

一進一退の攻防……なんて言えば格好が付くのか？

実際の所は、俺があゝの猿に振り回されている様なもんだ。

見た目以上に頭が良いのか、アイツに俺の間合いを見切られ始めているのかもしれないな。

軽やかだった程度の素人同然の剣だ。見切られても不思議じゃない。不思議じゃないが……なんか腹が立つ。

このままじゃ埒もあかないし、少しやり方を変えるかな。

俺は右足を引き身体を右斜めに向け、剣を右脇に取り剣先を後ろに下げ片手で構える。

普通の剣だったら重くて片手で持てないけど、この剣は不思議と重さを感じない。

それにこの構えなら、俺の剣の長さを確り把握出来ない筈。まだ間合いを見切られてない今の内に斬り捨てるしかない！

「……………」

俺は呼吸を整え、猿は飛び出すタイミングを見計らっている。

お互いに動かないで居ると、辺りが茜色に染まり始めた。

遠くの方で何か大きな音が聞こえたのと同時に、猿は俺に向かって飛び掛って来た。

俺は直ぐに剣を振らずにタイミングを見計らう。

直ぐに振るっても急停止されるのは分かっている。

なら、十分に間合いに入った所で一気に薙ぎ払うだけだ。

奴が間合いに十分に入ったのを見て、俺は剣を振り始める。

俺の動きを見て猿は、すぐさま急停止しようとするが

「ハアアアアアアアッ！！」

右足で更に一步踏み込み、強引に間合いを詰めて斬り捨てた。斬られた猿は胴から二つに別れ、雄叫びを上げる事無く消滅していった……。

猿を撃退した俺は、なのはを背負って家に向かっていた。剣はアイツを倒した後、自然と消えていったが……如何言う原理なのか分からん。

「足、大丈夫か？」

「うん。平気」

「そっか」

なのはは平気だと言うけど、俺達は医者じゃないからな。帰ったら一度医者に診せた方が良いかもな。

それにしても、さっきからなのはに元気が無いような気がする。

……やっぱり、あの戦いに巻き込んだのが不味かったかな？

「……ねえ、武君。剣を出す時に「受け継ぐ」って言ってたけど……

……アレ、本気なの？」

「宣言しちまったからな、受け継ぐしかないだろ。……とりあえず、

今度の夏休みに祖父ちゃん家に泊まり込んで鍛えてもらっかな」

「あんな化け物と戦うなんて無茶だよ……」

「そうかもな」

「あんなのは警察とか軍隊に任せようよ。何も武君が戦う必要なんて……」

「軍隊でも攻撃の通らない相手は辛いだろ。それにこうなった以上、もう引き返せないだろうし」

「……………」

……いや、引き返せなくなったのは今日じゃない。

あの日、夢の中の草原で力を受け継いでから、俺には引き返す道なんてなかったんだと思う。

なんで俺が選ばれたの分からないが、こうなった以上は前に進みしかない。

……でも、出来る事なら何事も無く生きて行きたい。

無理な願いなのかも知れないけど、そう簡単に割り切れる訳無いだろ。

「あ、そうだなのは。今日は自分ん家に帰れよ」

「えっ?! なんで!?!」

「なんでって……偶には帰らないと小父さん達も心配するだろ」

「それは……そうかも知れないけど」

「分かってるならそうしろって」

「……なら、今日は家に泊まって行つてよ」

「俺がなのはん家に?」

「うん」

「別に良いけど……許可降りるか?」

「大丈夫。なんとかするの」

「……まあ良いけどな」

急になのは家に泊まる事が決まったが、本当に大丈夫なんだろう  
か？

確かに何時も泊めてるから、偶には逆でって言うのも悪くないんだ  
けどな。

その後も適当な話をしながら家に向かって歩くけど、ずっとなのは  
の表情が晴れないのが気になった。



#### 第四話 終わる日常（後書き）

オマケ

武君は影と戦う事を決めた。

こんなに危ない目に遭ったのに、如何して戦おうとするの？

あんなのは警察とか軍隊とかに任せて、私達は私達の生活を送るべきだと思う。

態々危険な目に立ち向かうなんて絶対に変だよ。

それに、戦っていても死んじゃったら如何するの？

武君が死んじゃったら、悲しむ人が居る事をちゃんと分かってるの？

……うん、武君の事だ。きつと分かった上で受け継ぐって決めたんだ。

そう思えるからこそ、尚更私には理解なんて出来ない。

私はこの日常が好き。

武君が居て、小父さんや小母さんが居て、お母さん達が居るこの日常が。

辛い事や嫌な事もあるけど、それでも嬉しくて楽しい毎日が大好き。……だから、それを捨てるなんて事考えたくない。

如何して私達にこんな力が渡されちゃったんだろ。

こんなもの欲しくもなかったし、誰かに渡せるのなら直ぐに渡したい。

……そんな事出来ない位分かってる。でも、こんなモノ欲しくなかったよ……。

## 第五話　なのはの悩み（前書き）

お詫び。

夕方に一度最新話を更新したのですが、少々思いつくところがあり一度削除し、もう一度書き直して来しました。  
前に上げたのを読んでくれた方には申し訳ありませんが、こっちが本当の第五話になります。

## 第五話　なのはの悩み

影を狩る事を決めた俺は、次の日から鍛練を始める事にした。

始めると言っても、何をすれば良いのか分からないから、まずは祖父ちゃんに相談する事に。

俺の祖父ちゃんは、家に遊びに行くたびに剣の稽古を付けて来るちよつと困った人だ。

でも、剣の腕は超一流……らしく、本人曰く「ワシに掛ければ、木刀で金剛石が斬れる！！」との事。

実際に斬ったところを見た訳じゃないけど、相談するには丁度良い相手だ。

【祖父ちゃん。剣の稽古って何をすればいいんだ？】

【ふむ……。とりあえず、念入りに柔軟をした後町内を走り、その後素振り千回すれば良いじゃろ】

【せ、千回？！】  
【うむ。もつとも、極める気があるのならワシの家に住み込むべきじゃがな】

【いや、俺も学校があるから無理だよ】

【んなもん、コッチの学校に転校すれば良いだけじゃろ。寧ろそうせい】

【そんな無茶な】

無理矢理に転校させようしてきたが、なんとかはぐらかす事が出来た。

ちよつとだけ、泊り込みで修行するのも良いかも……とか考えてしまったのは内緒だ。

電話の最後に祖父ちゃんは、「一応、不破の奴にも相談しておけ」

って言ってきた。

俺も鍛練する場所として、高町家の道場を借りようと思っていたから頷いておいた。

……それにしても、なんでなのは父ちゃんの事を不破って呼ぶんだ？

そんなこんなで、修行を始めて二週間近くが経った。

最初の内は木刀の振り過ぎで、まともに腕が上がらなかったけど、最近は少しずつ慣れてきた。

人間の為れと言うものは恐ろしいね。……いや、本当に。

初日はあまりの辛さに投げ出さなくなったけど、今はそんな事も無くなり無心で振れる様になった……と言うか、素振りの時は何か考えていると辛くなるから考えない様にした。

鍛練を始めてから、時間が過ぎて行くのが早くなった様に感じる。ちよっと前に始めたと思ったのに、気が付けばもう二週間も経っていた。

世間ではゴールデンウィークに入ったとかで、テレビでも観光地の特集なんかしてる。

まあ、俺にはそんな事関係ないんだけどね。

影と戦うにはもっと強くならないといけないんだ。観光なんかしてる暇ないっての。

なのはン家は温泉に行くらしいが、ウチはそんな予定もないし、一人寂しく素振りするか……って思っていたのに……。

「……如何してこうなった？」

「……？ 一体何が？」  
「この状況がだ」

なのは達が泊まりで温泉に行くって聞いたから、今日と明日は自宅の庭で素振りしようと思っていたのに、なんで俺は高町家の車に乗っているんだ？

確か今朝は、朝早くから町内を一周して、ウチに帰って来たら何故か母ちゃんが外で待っていて、無理矢理車に乗せられたんだよな。

……つまり犯人は母ちゃんか！ 序でに言つと高町家の策略か！！

マジでなんでこうなつたんだ？ 俺の知らないところでどんな話があつたんだよ。

「ははは、スマナイね武君。こんな方法で連れて来ちゃって」

「小父さん。そう思うなら最初から話して下さいよ」

「いや、こうでもしないと来ないんじゃないかと思つてね」

「其処まで人付き合い悪くないですよ、俺」

「そうだったかい？」

「……多分」

付き合いは悪くない方だと思うけど、イマイチ自信がないな。

此処最近はずっと鍛練ばかりしてたし、そう思われても仕方が無いのか。

だからって、無理矢理に乗せる必要は無いだろ。母ちゃんは一体何を考えているんだ？

「まあまあ。折角来たんだし楽しまないと損だよ、武君」  
「……それもそうだな」

なのはの言う通り、折角来たんだし楽しまないと。

それに、今から帰ろうにもタクシーを拾う金なんて持って来てないっての。

車に揺られる事だいたい三十分くらいか。やっと目的地の温泉宿が見えてきた。

この宿は海鳴市の郊外にあるから、高町家は昔から利用しているとか。

ちなみに俺は、此処に泊まるのは初めてだったりする。

なにせウチの母ちゃんは、「旅行に行くなら遠出しよう」って考えの人だから、近場の温泉宿を利用した事がない。だから、此処に宿があるのも初めて知ったくらいだ。

なのはとは普段から一緒だけど、流石に家族旅行について行こうとは思わないっての。

「それにしても、やっぱり和室は落ち着くな〜……」

「武君、ちよつと良いかい？」

「なんですか？」

「少しだけ話があるから付き合ってくれないか」

「別に良いですけど……」

「ありがとう。それじゃ早速行こう」

宿に着いたばかりだけど、俺は小父さんの後について行く事に。

走っていたから汗も掻いてるし、さっさと温泉に入りたかったけど

……仕方が無いか。

そんな事を考えつつ、小父さんと逸れない様に後を追いかけた。

俺と小父さんは、宿を出て近くにある遊歩道にやって来た。遊歩道には人影が無く、この辺り一帯が静まり返っていた。

こんな所まで連れてきて、一体なんの用なのやら。他愛のない話しなら宿の部屋でも出来ると思っけど。

「それで小父さん。話ってなんですか？」

「……武君。最近のなのはを如何思う？」

「最近の……ですか？」

「嗚呼」

「………元気な様で元気がない。いや、アレは何か悩んでるのか」

「やっぱり、君にもそう見えるか」

そんな風に感じるように為ったのは何時からだったかな？

……確か、俺が狩人になるって決めた次の日からだったか。

なのはの奴、表面上は普段と変わらない様に見えるけど、付き合いの長い俺からすれば悩んでいるのが直ぐに分かった。

何か悩んでるなら相談に乗るって言っただけど、「なんでもない」って言われちまったんだよな。

アイツ、結構頭が固いから一度そう言うとか中々教えてくれないんだよ。……とは言っても、アイツが何を悩んでいるのか察しは付くけど。

「もしかして、話って言うのはなのはの事ですか」

「嗚呼。…あの子があんなにも思い詰めているのは初めてだからね」

「すみませんが、俺も何に悩んでいるのかは知りません」

「そうか……」

「でも、なんとなく察しは付いてます」

「ッ！ それは本当か武君！？」

「ええ……と言うか、きっと俺が原因でしょうから」

「……？ それは如何言う事だ？」

「あゝ……何処から話せば良いのかな？」

正直に話すとしても、実物を見ない限りは夢物語の様なもんだしな。だからと言って、影の事や力の事を話さないで説明するなんて無理だし……本当に如何しよう？

……色々と考えた結果、俺は小父さんに今の状況を説明する事にした。

説明してとしても信じて貰えるか分からないけど、はぐらかして説明する方法が思いつかなかった。

「……と言うのが今俺が置かれている状況です」

「……にわかに信じられない話だな」

「でも、嘘じゃないです」

「そうだろうね。……嘘を付くにしても、君の眼は真っ直ぐすぎる」

「……多分なのは、俺が継ぐ事を決めたのに悩んでいるんだと思います」

「あの子にも同じ力が宿ったからか？」

「其処までは分かりません。けど、俺が継ぐと決めた事が関係しているのは間違いないかと」

「……そうか」

アイツが悩み始めたのは、あの猿を倒したときの帰り道の辺りからだ。

何を悩んでいるのか分からないけど、あの時に俺を考え直すように言ってたから多分そうだろう。

……俺だって、受け継ぎたくて受け継ぐ訳じゃない。ただ、そうし



ないと守れなかったから。

その場限りの嘘にすれば良かったのかも知れないけど、アイツ等は何時かまた襲って来る。

そうなったら、俺はきつとアイツ等に立ち向かう。……そんな風に為って来ると、継ぐ継がないとか関係なくなるだろ。

「……武君。君は継ぐ事を決めて後悔はしないのかい？」

「それは分かりませんが……戦わないと守れない事を知りましたから」

「……君くらい歳でそれを知るなんてね」

「出来る事なら、まだ知りたくなかったですけどね」

自分でもトコトン子供らしくないとは思うけど、もう後には引き返せないからな。

俺は溜息を一つ吐いて、なんとなく空を見上げた。

空にはまばらに雲が浮んでいて、気ままに漂っているのが少し羨ましく思えた。

なのはSide

今日は久し振りの家族旅行なの。

今回は武君も一緒だけど、武君とは家族も同然だから特に関係はないの。

……本当は一緒に温泉に入りたかったけど、お父さんが用事とかで武君を連れて行っちゃった。

一体なんの用か分からないけど、二人は仲も悪くないし、きっと変

な話じゃない筈。

「……………」

「如何したのなのは。一人でボーっとして」

「あ、お姉ちゃん」

「何か悩みなら相談に乗るよ」

「……………うん。何でもないから気にしないで」

「そう？ ……あんまり思い詰めちゃ駄目だよ」

「だから、大丈夫だって」

お姉ちゃんにはそう言ったけど、本当は悩んでいるんだよね。

二週間前のあの日。武君が影と戦う事を決めた時の事で……。

如何して武君は、あの影達と戦おうと思えるんだろう。私には不思議でしようがないの。

とても生き物とは思えない姿に、あの得体の知れない力。

通ったり触れたただけで黒く塗り潰すなんて、普通の生き物に出来る事じゃない。

……………それに、私に近寄って来た時の影の眼。アレは本当に不気味だった。

なんて言うか……………何か品定めするような感じの眼だった気がする。

武君はアレと正面から戦ったのに、恐いとか感じなかったのかな？

私はただただ恐かった。武君が傍に居てくれるのに、得体の知れない恐怖がずっと傍に居るような気がして本当に恐かった……………。

なのに、如何して武君はアレと戦えるんだろう。あんなの、子供の手に負える相手じゃないよ。

……………それに、このままだと武君が遠くに行っちゃうかもしれない。私にはそっちの方が恐い。

私はこの日常がずっと続いてくれると思ってた。……でも、武君に取っては違うのかな？

私にとって武君はとても大切な人。そんな人と離れ離れになるなんて耐えられない。……でも、あの影達と戦うなんて出来ない。

……ねえ、武君。私は一体如何すれば良いのかな？

「……………」

「ちよつとなのは、わたしの聞いてる？」

「…………え？」

「え？ つじやないよ。折角温泉に来たんだから、お風呂に行こうって言ってるじゃない」

「あ、そうだね。行こう、お姉ちゃん」

「全くもう。……本当に大丈夫？ お姉ちゃんが相談に乗るよ？」

「……じゃあ、恋の悩みの相談に乗ってくれるの？」

「それだけは勘弁して！！」

「なら、相談しない」

「待ってよ、なのは」

……お姉ちゃんには悪いけど、この悩みは誰にも相談出来ないよ。そもそも、こんな悩みを誰に打ち明ければいいのか分からないの……。

私は普段通りにしながらも、心の中でお姉ちゃんに謝るしか出来なかった。

なのはSide out

## 第六話 真夜中の戦い

「5」

「6なの」

「はい、7」

「ダウト」

「二人して言い切った?!」

俺は今、なのはと美由紀さんの三人でダウトをしている。

時刻はすでに20:00を過ぎてるから、あまりホテルをうろつく訳にも行かない。

それにうろつくとしても、行く場所なんてゲームコーナー位だ。

小遣いもそんなに持ってないし、あんまり遊ぶ事は出来ないんだよな。

「お姉ちゃん。早くカードを回収して」

「せめて確認くらいしようよ!？」

「そんな事しなくても分かります。なので、早くして下さい」

「ぐぬぬぬ……。分かったよ、回収すれば良いんでしょ回収すれば!」

美由紀さんは不満気に床に置かれたカードを集める。

だけど、さっき出したカードが間違はなく7じゃない。

……何故なら、7のカードは全て俺の手元に来ているからだ。他の人が7を出せる訳が無い。

ついでに言っと、なのはの6も怪しかったんだが……手元に二枚しか無いから見逃した。

もしかしたら嘘を吐いてるかも知れないが、残りの二枚の行方が分

からない状態で、流石にダウトを言う訳には行かない。

このゲームは駆け引きが重要だから、考えすぎるのも如何かと思  
うがな。

「それじゃ続き。8」

「9」

「10ね」

「11つと」

「12」

「武君、それダウトなの」

「悪いなのは、外れだ」

「ウソツ?!」

「本当だ。……ほれ」

「……やられたの」

そう言いながらも、なのはは床にあるカードを回収する。

こうして遊んでいると、あまりにも普段通りで、本当に悩んでいる  
のか分からなくなる。

だけど、時折ボーっとしている所を見ると、何か考えているのは間  
違いない。

なのはの奴、何か考え始めると周りが見えなくなるからな。

普段なら勉強以外でそうは為らないのに、それ以外の時にボーっと  
してたら何か悩んでいるに違いない。

大した事でないのなら、俺か母ちゃんたちに相談してるからな。

「続きを始めるよ! 13!」

「1だよ」

「2」

「3!」

「4だね」

なのはの悩みは、あの日の事に関係しているのは間違いないと思うんだけど……一体なにで悩んでいるんだ？

俺が受け継ぐ事を決めた事か？ それとも、自分も力を持っている事か？

……どちらにしろ、ソツチ関係なら俺に相談してくれても良いだろう。

信用されてない……って事はないだろうけど、少し悲しい気もするな。

「11」

「武君、ダウト！」

「残念、外れ」

「ウソでしょ?!」

「またやつちやったの……」

俺に相談出来る事なら相談して欲しいが、ここまで何も言ってこないとなると望み薄だな。

そうになると、小母さんが母ちゃんに期待するしかないけど……コツチも微妙か。

全く、変に抱え込まないでもっと気楽に相談してくれば良いのに。

……あ、気楽に相談出来ないから抱え込んでるのか。

時刻が22:00を過ぎた頃、俺達はゲームを止めて眠る事にした。美由紀さんはまだ起きれるみたいだけど、最近早起きをしている俺にはそろそろ辛い。

鍛練を始めてから早く起きる様にしてるから、その分寝る時間も早くなった。

まあ、遅くまで起きてする事なんてないし、別に良いんだけどね。

布団に入って寝ていると、ふと変な音が聞こえて来た。

物音……とは違う、何かが這いずる様な変な感じの音……。

その音はこの部屋ではなく、廊下から聞こえて来る。

誰かが布団に包まって廊下を歩いている……って事はないだろうし、コレは一体なんの音だ？

無視して眠れば良かったんだけど、如何してもその音が気になっ  
てしまった。

俺は皆を起こさない様に布団から抜け出し、静かに部屋から廊下に  
覗き込んだ。

「……なんだこりゃ？」

廊下を見ると、廊下全体が黒く塗り潰されていた。

この感じからして影が出現したのは間違いないけど、なにか前の時  
とは違う様な気がした。

確かに黒く塗り潰されてるけど、その上からもう一度塗り潰されて  
いる様に見える。

前に戦った犬や猿の時にはこんな事は無かったのに、今回は違うの  
か？

多少疑問に思うものの、このまま放置するわけにも行かない。

「…行くぞ、蒼刃」

刀を取り出した俺は、真っ黒に塗り潰された廊下に出ていった。

今回は前の時とは何かが違うし、気を引き締めていかないとな。

俺は深呼吸をして心を落ち着かせた後、影を捜す為に廊下を駆け出

した。

旅館の中は、俺達が泊まっていた階の廊下は全滅。

上の階は分からないが、下の階も同じ様に黒く塗り潰されている。  
今が夜中だから良かったけど、昼間にこんな事に為ってたら大変だったな。

俺は平気だが、普通の人ならどんなに頑張っても自分の部屋に辿り着けない。

いや、部屋に辿り着く前に影に襲われるほうが危険か。

……でも、アイツ等に襲われるとどうなるんだ？　ちょっと気にするな。

今分かっていている事は、黒く塗り潰された場所は他の場所との繋がりがなくなるって事だ。

俺は蒼刃のお陰か、境界線を越えて動き回る事が出来るけど、他の人じゃ別の場所に弾き飛ばされる。それ以外の事は何も分かっていない。

……どうせ引き継がせるなら、アイツ等の事を教えてくれたって良いだろう。

「意外と先代はケチだったのかね？」

あの夢の中で一度会ったきりの人の愚痴を零してみる。

こんな事を言って何かが分かる訳じゃないけど、そう思えてしまう。  
先代が聞いてたら怒られそうだけど、気にしていても仕方が無い。  
俺は頭を切り替えて、引き続き影の搜索を続けた。



旅館の中をアチコチ搜した俺は、一階のロビーにまでやって来た。  
その間に影の姿を見つけられなかったが、此処に来て漸く見つける  
事が出来た。

今回出現した影は……黒い蛇って言えば良いのかな？

黒くて何処が頭なのか分からないけど、手足はなく、胴体が異様に  
長いから多分そうだろう。

「……しかし、デカイな」

今まで出て来た影もそうだけど、今回の奴も通常の何倍もの大きさ  
だ。

人どころか、ポニーくらいの大きさなら軽く飲み込めるんじゃない  
のか？

……でも蛇って、見た目以上に口が広がるから、下手すると牛も飲  
み込めるのか。

「まあ、そんな事気にしても仕方が無いか。俺は俺の仕事をするだ  
けだ」

俺は刀を構え、目の前に居る黒い蛇に斬り掛かった。

素早く振り下ろしたが、蛇の動きはそれ以上に速く、俺の攻撃は軽  
々とかわされた。

俺は直ぐに追撃しようとしたが、それよりも速く蛇は自身の尻尾で  
迎撃してくる。

今の時刻が深夜で周りが黒く塗り潰されている所為か、真つ黒の奴  
の攻撃に反応出来ず、そのまま壁際に吹き飛ばされてしまう。

「ッ？！ い、今は効いた……」

俺は奴の身体に触れた事で侵食されたかと思ったが、意外とそんな事はなかった。

コレも蒼刃のお陰なのか分らないが、少なくともこの格好でなら奴等に触られる事は分かった。

……でも、さっきの攻撃はかなり痛かった。正直、戻さなかったのが不思議なくらいだ。

「……………」

蛇は追撃せずに俺の事をジッと観察してくるけど、何時攻撃されても良いように、黒い尻尾を左右に振り回していた。

周りが暗いから微かに見えないけど、間違いなく動かしてる。

迂闊に前に出て攻撃しようものなら、またあの尻尾で壁際まで吹き飛ばされるだけか。

だからと言って、ここでジッとしていても仕方が無いんだが……何が良い手がないもんかな。

「この距離から攻撃出来れば良いんだけど、そんな事出来るわけ無いしな」

ゲームや漫画じゃないんだ、そんな事が気軽に出来たら恐いつての。仮に在ったとしても、俺みたいにな素人に出来るとは思えないがな。

「……さて、本当に如何しようかな？」

奴の身体は周りの色と同化してるけど、尻尾を振り回している動作は見える。

もう少しはつきりと見えれば、尻尾を避けて首を斬り落せるかも知れないんだが……。

やっぱり、この暗さをなんとかしないと駄目かな。

周りは既に黒く塗り潰されてるから、後は何かの明かりで周りを照らすしかないか。

土産コーナーにあるライトでも使わせて貰うか？ ……いや、あそこも黒く塗り潰されてるから無理か。

だとすると、他の明かりを捜さないと行けないんだが……何か在るか？

「……………あ、アレならいけるかも」

アレ以外に思いつかないし、ここは試してみるか。

そう決めた俺は、刀を片手で持ち、脇構えで刀を構え意識を集中する。

意識を集中し始めると、刀身から蒼い光で少しずつ輝き始めた。

コレが俺の考え。刀を出す時に出る光で辺りを照らす方法。

……本当は足元から光が立ち上ると思っていただけ、多少は見える様になったから良いか。

流石にロビー全体を照らす事は出来ないが、尻尾の動きが見えれば十分だ。

俺は刀を握り締めて、もう一度蛇に立ち向かって行く。

一気に間合いを詰めると、蛇は自分の尻尾で叩き付けるように攻撃して来た。

さっきは暗くてよく見えなかったけど、今度は蒼い光のお陰で奴の攻撃が見える。

俺は左足で強く踏み込み、叩き付けられる前に斬り落とした。

「ッ！！！！！」

俺は蛇の叫び声を無視し、更に踏み込んで頭を斬り捨て様としたが、

「なッ?!」

奴は、剣を振り下ろすよりも早く俺に巻き付いてきた。

蛇に力一杯締め付けられていると、身体の中から何かが軋む音を聞いた。

あんまり考えたくないけど、今のは骨が軋む音か。コイツ、どんな力で締め上げてるんだよ。

「グッ……」

骨が折れる前に脱出したいけど、締め付ける力が強くて身動きが取れない。

刀を持っている手は無事だが、こんな体勢じゃ上手く刀を振るえない。

少しずつだけど、締め付ける力が強くなって来てるから早くしないと本当に不味いな……。

俺は闇雲に刀を振るうが、蛇には掠りもしない。

それどころか、下手に刺激したもんだから、蛇は締め付ける力を更に上げて来た。

「~~~~ッ!!」

……今、何かが折れる様な嫌な音が聞こえて来た。

本当に折れたか分からないけど、もしかしたら骨に輝が入ったのかも。

どちらにせよ、コレ以上締め付けられたらヤバイな……。脱出できるか分からないけど、思い付く限りの手を使うしかない！

俺は刀を逆手に持ち替え、思いっきり蛇の身体に深々と突き刺した。

「  
ッ！！！！！」

刀が刺さった蛇は痛みから暴れ出すが、今の俺にはそんな事関係ない。

俺は刀を力一杯振り上げ、蛇の身体を斬り裂いた。

この時に重要な器官でも斬り裂いたのか、蛇は絶命し、叫び声を挙げる事無く消滅していった。

蛇が消滅した事で、俺は漸く締め付けから解放されるが……激痛で喜ぶ余裕が無かった。

「……今回は本当に危なかったな。あのままだったら殺されてたかも」

油断してた心算はないが、俺はまだまだ弱い。

幾ら鍛練を始めたからって、直ぐに結果が出る訳じゃないのは分かっている。

……でも、毎回こんな調子じゃ、命が幾つあっても足りない。

強くなる為には鍛練を続けるしかないけど……一人で素振りして強く為れる訳無いよな。

やっぱり、祖父ちゃんの元で一から鍛えて貰わないと駄目かな？

「……まあ、それは休んでから考えるか」

俺は立ち上がって部屋に戻ろうとしたが、周りはまだ黒く塗り潰されていた。

元凶だと思っていた蛇を倒したのに、なんでまだ黒くなっているん

だ？

……まさか、蛇の他にも影が居るってのか？！

そう思った俺は、直ぐに周りを警戒し始めた。……すると、俺の左腕に黒い紐の様な物が巻き付いた。

一体何が巻き付いたのか、腕に付いた紐の先を見てみると……其処にはデカイ蛙の姿があつた。

「蛇の次は蛙かよ……」

二体同時に戦わなくて良かったと思う反面、ボロボロの身体で連戦しないといけないのかと思うとゲンナリして来る。

……とは言え、このまま逃がす訳にもいかないし、さっさと片付けるか。

そう思い、俺は刀を構えると……舌が巻き付いている腕に違和感を覚えた。

如何してか分からないけど、巻き付かれている腕の感覚がない。

一体何事かと思い、腕に目を向けると

「……うそ……だろ」

左腕が黒く侵食されつつあった。

少しずつ黒くなって行くのを見て、俺は直ぐに巻き付いている舌を斬り落そうとした。

しかし、蛙は斬り落とされる前に舌を引っ込めてしまう。

「クソッ！」

俺は悪態を付くも、腕は既に二の腕まで黒く侵食されている。

さっきの戦いのダメージも抜けてないのに、片腕を使えなくされたのは不味い。

それに、ゆっくりだけでも少しずつ侵食範囲が広がって来ている。  
あんまりノンビリしてる暇も無いし、手早く片付けるしかないが…  
…ハンデがでか過ぎるだろ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0985x/>

---

受け継がれる力

2011年10月10日03時25分発行